銀色の翼

市野川 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀色の翼

【Ｎコード】
Ｎ８９７３Ｚ

【作者名】
市野川　梓

【あらすじ】
惑星同士での戦争が日常化した時代に生きる人と人とが生み出す翼という幻影…
人々は再び平和な日々を取り戻す事ができるのか――――
第一章完結までは猛スピードで投稿しています。
調子が良いときは一日４話ぐらい更新する事もあるかと…
最低でも一日１話は必ず更新しますのでヨロシクです♪

第零翼　機械の翼

あれから３０年という月日がたった。この時代において「３０年」と言う月日は旧時代にとって一世紀同等の時だ。惑星同士の宇宙対戦が幾度となく勃発し、星々はそれに追われている。地球と言う星は壊滅状態に陥っていた。決して地球の軍事力や技術が遅れている訳ではなく、ある一つの星が強すぎたのだ。

―――その星を「ゼアール星」と言う。ゼアール星と同盟を組む星は増え続け、今や銀河系のほとんどがゼアール星連邦軍だ。ゼアール軍は１００億という軍勢で地球に攻めてきた。連邦軍に対抗する地球・宇宙警察軍は１０億と言う１／１０の軍勢で挑んだ。―――第五次宇宙大戦に。

　この戦いの犠牲は計り知れない。ゼアール軍は機械兵で構成されている。ゼアール兵は殆んどが肉体の半分以上が機械に蝕まれた機械人間（アヒューマン）なのである。身体に鉄を流し込み、強靭な肉体を手に入れた馬鹿な人間は頭がイカれている。感情がないのだ。嬉しい、悲しい、楽しい、そして苦しみ。あえて感情があると言うならば殺意だけである。逆に地球・宇宙警察軍、通称「ＥＡＲＴＨ軍」に機械人間はいない。感情を持つ人間である。…表向きはそうなっていた。しかし世界政府がひた隠し続けている世界機密にはＥＡＲＴＨ軍にもただ一人だけ機械人間が存在すると言われている。民間にはもちろん知られていない。日本人でまだ１８歳という若い人間である―――

４０ＸＸ年４月２０日

今日は広瀬佑助の１８歳の誕生日である。たった一人で祝っていた。家族をゼアールに殺され友達もみんな徴兵へ行ってしまった。だから身内なんていなかった。少年は幼少期から親に宇宙警察について教育され、今や宇宙警察の最年少の暗殺部隊に所属している。

決して運動能力が優れているわけでもない。昔から小柄な身体だった。何故ゼアールの魔の手から逃れることが出来たのか…それは彼が地球にいる唯一の機械人間だったからであろう。体右半分が機械である。

紛争に巻き込まれて右半分が動かなくなってしまった。父が素晴らしい功績を納めていたためか、世界政府から生え抜きの医者が派遣され大手術の後、この身体になった。わすが九歳の頃の話である。今は宇宙ステーションで暗殺部隊をしている。本人すらよく知らないが暗殺部隊は四人しかいないらしい。佑助は自分が優れているなんて思ったことがない。ましては普通の人間でいたかった。しかし家族の復讐に燃える佑助にとってこれ以上にない上手い話だった。ＥＡＲＴＨ軍は7部隊に分かれている。それぞれの部隊に隊長がいて暗殺部隊の人間は全員隊長である。佑助は5番隊の隊長を任されている。あまり知られていないが、第8番隊が特別暗殺部隊である。佑助が機械人間だと知っているのはＥＡＲＴＨ軍の隊長、世界政府の上層部の人間ぐらいしかいない。

状況は悪化している。ＥＡＲＴＨ軍の最終防衛ラインがゼアール軍をなんとか地球への侵入を防いでいるが、もうそれも一ヶ月と持ちそうにない。まだ地球には残された人々がいる。緊急措置として簡易人工星「イージス星」に避難させている最中なのだ。

第一翼　暗殺の翼

――ＰＭ７：１５　宇宙ステーションにて――

『５０５号室　第５番隊隊長　広瀬佑助』

とモニタリングされた部屋で佑助は暮らしている。ＥＡＲＴＨ軍にとって暗殺部隊「ＳｕｐｅｒＮｏｖａ」のメンバーは宝である。故に身の安全はは保証されているされている。―あくまで基地内においてであるが。

暗殺部隊ＳｕｐｅｒＮｏｖａの仕事は名の通り暗殺である。宿敵ゼアールの元帥を殺すのが最終目的だ。今回の任務はゼアールの中枢部隊長暗殺を命じられているが成功確率は極めて０に近い。ＳｕｐｅｒＮｏｖａは今まで１０００以上の人を暗殺してきた。そんなベテランでも成功確率が　０．００９％しかないのだ。命令は４月２１日ＡＭ１０：００に宇宙ステーションを出発である。

突然サイレンが部屋中に鳴り響き静寂を破った。一瞬緊張が走る。

「侵入者か…」

折角の誕生日パーティーが台無しである。そっとケーキに刺さっているロウソクの火を消した。

『侵入者ハッケン！侵入者ハッケン！タダチニ５番隊隊長ハ侵入者ハイジョニツトメロ！隊員ハゼンイン配置ニツクヨウニ！』

不器用なアナウンスが部屋にこぼれてきた。

「へいへい」

そう言って佑助は壁に設置された宇宙ステーションの地図を見ると動いている赤い点を見つけた。

宇宙ステーション内への侵入者の排除は暗殺部隊の役目である。

自動ドアが開いて部屋を出た。するとすぐ横のシャッターが降りて道を塞いでしまった。佑助は廊下の脇についている小さな鉄板の上に乗った。すると佑助を乗せた鉄板は動き始めた。時速８０キロはでている。ここ宇宙ステーション通称、守護者達の基地（ガーデ

ィアンズコロニー　以下ＧＣ）は輪の形をしている。輪の中心部はＧＣの心臓部である指示棟となっている。何万という人を収容でき、とてもじゃないが歩いて移動はできない。だからこうした移動手段がある。

今回の侵入者のパーソナルレベルは３。結構高い数値だ。パーソナルレベルは最高で５。いままで存在が確認されていない程の力の持ち主であろう。最弱の１でも生命力は普通の人間の１０倍はあるだろう。

侵入者はもちろん機械人間であると推測でき油断はできない。

佑助は侵入者を見つけるなり、侵入者目掛けて小型ナイフを投げた。侵入者はそれに気付きナイフをかわそうとするがもう手遅れだった。侵入者である機械人間はその場でバラバラになり鉄の混じった血が辺りに散らばった。そのとたん何処からわいたのか掃除ロボットが死体を綺麗に片付け始めた。

すると廊下を赤く染めていた緊急ランプが消え再び静かなＧＣへ戻った。

ガラス越しに宇宙を見ると地球の近くで戦闘が行われているをはっきりと確認することができる。この基地からも大勢の兵が駆り出されている。また戻ってこれるのはよくても１０人くらいしから居ないのだろう。

佑助が物思いに耽っていると、肩を叩かれた。振り返るとそこには第３番隊隊長　武蔵　大和の姿があった。

第二翼　劇薬の翼

大和は劇薬などの危険物を専門に研究している。いつもコートの中に危険物を隠し持っている胡散臭い奴だ。
あまり仲も良くなく話す気もならない。しかし腕は確かで今までの暗殺において重要な役割を十二分に果たしてきた。
実戦訓練でも佑助の記録を遥かに超えている。バカには出来ない。
姿は何週間も手入れをしていなそうな汚れた顔。無精髭を生やし、白衣は継ぎ接ぎだらけでボロボロ。暗殺部隊なんて高い配給の方なんだから買い替えれば良いのに…なんて会う度に思ってしまう。
片手には試験管。中にはいかにも危険そうな紫の液体が入っている。
大和は暫く佑助の顔を見つめると急に喋りだした。
「やぁ、ユウ。例の頼まれていた薬出来たよ。いままで作った薬のなかでも指折りの猛毒になったぁ」
枯れた、しわくちゃな声。
「それはどうも。案外早かったな。」
佑助は礼を言い怪しそうな薬を受け取った。大和は少し小声で
「そのクスリ…ちょいと法…破ってるからあんまり人前で使わないようにね。」
と忠告してきた。
「殺すか殺されるかって状況で法なんて守ってられるかよ。」
素っ気なく返してまたレールに乗って部屋に帰ろうとした。
すると通信で召集がかかった。指令棟からのようだ。また大和が割り込んできた。
「指令棟から？間違ってもボスなんかに…」
佑助は溜め息をついて
「分かってるよー」
と心ない返事をして指令棟に向かった。

佑助は巨大な扉の前に来た。扉の端にはパーソナルレベル４の兵士が立っている。こいつらはＳｕｐｅｒＮｏｖａでも苦戦を免れないくせ者だ。相手にはしたくない。端に居る無愛想な兵士に話し掛けた。

「第５番隊隊長、広瀬佑助だ。ボスに呼ばれてやって来た。」

門番はまた顔色一つ変えずに

「では部隊長手帳を見せて貰えますか。」

はぁと小さい溜め息をついて佑助は胸ポケットから小さな手帳をだした。

手帳には顔写真、名前などが載っており、個人の証明にも使われている。

しかも部隊長の手帳は特別仕様で裏にＳｕｐｅｒＮｏｖａのマークと部隊長証が彫られているのだ。

「これは失礼しました。では３ドア開きます。」

すると目の前の巨大な扉は音を立ててゆっくりと開いた。

第三翼　軌跡の翼

扉の中には巨大な「コア」と呼ばれている言わば、ＧＣの心臓がありそれを囲むように大量のオペレーターが常時待機している。みな佑助には眼もくれず忙しそうにモニターに向かって話し掛けている。そのオペレーターの間をすり抜け奥にある小さなドアの前に佑助は来た。

ドアの横に設置された指紋認証と眼球認証、声帯認証と言う厳重なロックを通って中に入る。

中には一つのデスク、椅子、そして一つのモニター…座っているのがこのＥＡＲＴＨ軍最高指令隊長である。

名は誰も知らない。故にボスと呼ばれる。パーソナルレベルは限りなく５に近い、４＋＋＋と言う人類最強の人物だ。

噂では１９歳と言う若さでこの役職を任されたほどらしい。

とてもみなに信頼されており、佑助自身も信頼し尊敬する憧れの人物だ。

滅多に個人には通信をいれない総隊長に呼ばれ、少し緊張気味の佑助はゆっくりと敬礼をした。

「只今、第５番隊隊長、広瀬佑助、参上しました。」

総隊長は少し口角を上げた。

「おお。ようきた。折角のオフに呼びつけてすまない。緊急の連絡でな。」

部屋は小さな明かりが一つしかないため、あまり総隊長の表情を確認することが出来ない。

「と言いますと…？」

「それが、四日前にゼアールに偵察に行った軌跡が帰って来ないのだよ…。通信も途絶えてしまい、安否の確認もとれない状況でな。」

心なしか総隊長の声が震えている。

「ＳｕｐｅｒＮｏｖａの二人には事前に伝えてあるのだが、ゼアー

ル星への作戦の日程をずらして三時間後にここを発ってもらいたい。」
キセキ…名前は藤咲軌跡。第７番隊隊長でＳｕｐｅｒＮｏｖａの隊長も務めている。悔しいが最も総隊長に力が近い人間であろう。パーソナルレベル４以下の相手ならあまりの殺気で剣を抜くことすら儘(まま)ならない…。今、ＥＡＲＴＨ軍で総隊長を除くレベル５に最も近いのはキセキだという説が有力である。現にキセキは総隊長の一人息子なのだ。
そのキセキが任務から帰還しなかった事など今までなかった。心配になるのが普通だ。
「で、君に臨時隊長を務めてもらい、キセキを救出してもらいたい。…戦争に私情を挟んではいけないのは充分承知してるんだがな…。」
総隊長は心配性な事で有名だ。しかしその隊員一人ひとりに対する愛情がこの人を惹き付ける一つの要因なのかもしれない…
「問題ありません。キセキはボスの息子さんである以前に我らのチームメンバーです。メンバーの為にならこの命懸けて助けになりましょう。」
「社交辞令でも嬉しい。では船はセンターに用意してある。準備ができしだい出発してくれ――――

第四翼　彼女の翼

こうして佑助は指令棟をあとにした。すると一人の女性が寄ってきた。
佑助の彼女、岩島舞。佑助と同い年、パーソナルレベル２＋で普段は指令棟のオペレーターをしている。今日はオフなのだろう。
「ねぇ、ユウ！！お誕生日おめでとう♪はい、これプレゼント！！」
舞は恥ずかしそうに小包を渡してきた。佑助は少し照れ臭そうに受け取る。
小包を開けると、真っ赤なマフラーが入っていた。
「宇宙って年中寒いでしょ？だからマフラー編んでみたの！どう？悪くない出来でしょ！？」
早速マフラーを首にかけた。
「暖かい…サンキュー」舞は笑顔のまま続ける。
「よかったぁ…それ編んでたら遅くなっちゃって。じゃあ部屋帰ってパーティ始めよ！」
佑助の言葉に満足して廊下を歩き出す舞にそっと話し掛けた。
「いや、パーティはお預けになった…」
舞はすっと振り返った。困惑している。
「えっ？どういうこと？」
「予定が変更になった。三時間後にここを発つ。だからパーティは帰ってきてからだな。」
佑助は視線を舞から逸らして言った。
「変更になったって…今日はオフになったんじゃないの！？折角のユウの誕生日だって言うのに…何で急に？」
舞は食い下がらない。
「キセキの安否確認のためだ。…ゼアールに強襲をかける…」
舞の眼がみるみる見開いていく。
「！！！？？？ゼアールって…ユウ！！もう危険な事はしないって

約束したじゃん！！可笑しいよ…今頃になって急に…」
その場にへたり込んでしまった。
「今度は本当に死んじゃうかも知れないのに…ねぇ？ユウ…考え直そうよ？」
佑助は何も言うことが出来なかった。そっと舞の横を通り過ぎて、背を向けて
「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ．」
そう一言いって立ち去った。
舞は泣いていた。彼が自分の手元から離れてしまうようで。あの時もそうだった。佑助が暗殺部隊に所属になるときもあんな風にかっこつけていなくなった。今回もそうだ。自分を置いて何処かへ行ってしまう。彼女に出来ることはただ無事に帰ってくるように祈る事だけだった。

４月２１日ＡＭ０：４５
いつの間にか日をまたいでいた。佑助は宇宙の中にいる。宇宙船に乗っているのは全員で三人。一人は大和。口を開けて爆睡している。もう一人は黒いフードを被ったコックピットに寄り掛かって寝ている巨漢。
ふと舞に貰ったマフラーが眼に入った。綺麗な編み目はまるで売り物のようだ。
端を見るとユウスケと小さく黄色い糸で縫われている。ふっと小さく笑って佑助は眠りにおちた。

第五翼　魔性の翼

４月２１日ＡＭ７：１０
佑助が起床する頃には他の二人は起きていた。ここは宇宙空間。朝だろうが夜だろうが外は真っ暗だ。時刻を知らせるのは時計のみ。佑助は軽い朝食をとって出撃準備を始めた。
　暫くすると目の前のモニターに巨大で真っ黒な星が見えてきた。あれがゼアール星…。これだけ遠くから見ても高層ビル群を大量に確認できる。人工の星なのだ。大きさは地球の約１５０倍。自然はなく、当然空気も存在していない。それは住んでいる者達が人間で無いことを示している。佑助の肺は人工肺で補われているため問題はない…
　次の瞬間、機体に重い衝撃が走った。それと同時に機体内が赤いランプで染まる。鳴り響くサイレンの音―――
「どうやら敵の襲撃を受けているようだな。」
そう冷静に呟いたのはこの船のパイロット、羽鳥　守。第４番隊隊長である。その巨大な身体を操縦席に持っていき、大袈裟に座り込んだ。
「ぐひゃひゃひゃひゃあ！！人間なめてんじゃねーぞぉ！？ぶっ殺してやるぅ～！！」
…羽鳥はＳｕｐｅｒＮｏｖａの中で最も操縦に長けているのだ。その操縦の腕を武器にここまでのしあがってきたほどである。
ここまで宇宙船を上手く操れる人間を佑助は見たことがない。
が、コイツは戦場となると頭がイカれてしまう魔性野郎なのだ。敵味方関係無くマシンガンをぶちまける、ちょっとアブナイだった。大和と佑助は嫌な予感がしていた。長いこと一緒にいる経験からである。
…やはり二人の予感は的中した。機体が右から左へ大きく揺れる。守は完全に逝ってしまったようだ。こうなるともう誰にも止められ

ない。目の前の敵があっという間に消えて行く。だんだんスピードも上がってきているようだ。―ついにスピードが光速に達した。光速は一秒間に地球を七周半できる程早い。もうゼアール星は目と鼻の先である。それでもお構いなしにつき進んで行く。すると羽鳥が言った。

「ぶっつかりまーす！！ご注意くーださーい！！」

「おい、ちょっとまっ…

佑助が注意した頃にはもう手遅れ。もの凄い爆音と共にゼアール星に着いた。

――ＡＭ９：１２　ゼアール星第４区画にて――

佑助達は大量の機械兵に追われていた。隠密作戦のはずが守が派手に正面から侵入したためゼアールの現存戦力が全てこちらに向かってきたのだ。

通常兵のパーソナルレベルは２＋＋～３程度。佑助達なら充分倒せる範囲だがあまりの数にこれでは太刀打ちできない。

今はとにかくこの戦力をなるだけ減らすのが最優先だ。佑助は意味もなく酸素ボンベを着けながら大和に聞いた。

「おい、大和。あとどれくらいかかりそうだ？」

大和は例によってボロボロな白衣からこれまた危険そうな薬品同士を組み合わせている。走りながらなので大変そうだ。

「はぁ…はぁ…あと、２５０歩くらいか…な？」

後方では守が簡易シールドを張っている。一気に何万という銃弾を受けているため、エネルギーの減りも早かった。

「おい！！もうシールド持たねぇぞ！！ヤバくないか！？」

羽鳥も息が上がってきている。佑助はさらりと答えた。

「元と言えばお前の責任だ。後はお前自身が盾になれ。」

「えぇ！！…無茶言うなよ…。」

佑助は冷静だった。いままでこんな修羅場は何百と経験してきているのだ。今更焦る必要などない。

「ユウ…出来た！！なんとか…いけそう！！」
大和から合図があった。佑助は突然立ち止まる。後ろから守の声が聞こえてきた。
「やっとか…。頼むぜ、大和兄」
クルリと振り返り佑助は叫んだ。
「発射っ！！」

第六翼　殺意の翼

佑助の合図と同時に大和は手に持っていたフラスコの蓋を外した。その瞬間、それまで佑助達を追い掛けていた機械兵たちは急にギシギシと音をたててばらばらになってしまった。残ったのは無惨になった無数の機械片…。一瞬の出来事だったため、何が起こったのか理解するのに時間がかかった。守はポカンとしている。

「軽く五万は居たぞ…それを一瞬で…機械兵にならなくて本当に良かったわぁ。」

コイツの蛇行運転のせいでこんな事態を招いたと言うのにお気楽な奴だ。

大和は自慢げに仕組みを説明しだした。

「まぁね。奴らの身体の基盤中枢部を酸化させただけなんだけど、即効性だからすぐばらばらになっちゃった。」

佑助は何が大きな殺気を犇犇(ひしひし)と感じていた。それと同時に身体右半分に違和感。たぶん大和の劇薬の影響を自分の基盤にも少なからず受けてしまったのだろう。しかしここで症状を訴えれば自分が機械人間であることを晒すことになる。いつあの機械兵達のようにばらばらになるか分からない恐怖と何処からか感じる強力な殺意の恐怖が佑助を焦らせていた。

「おい、佑助？大丈夫かぁ！？」

守の一言で我に返った。足が震えている。なんだこの底の見えない恐怖は…。

「いや…すまん。何でもな…」

佑助は即座に振り返った。するとそこではばらばらの機械兵の部品達が急速に集まり出していたのだ。なにか形を形成している。

「なんだ…これは…。」

佑助はやっと強力な殺意の出所を確認することができた。部品達はみるみる集まって巨大な機械兵へと変形していく。巨大兵に変化し

ていくと共にその兵達の殺意を吸収しているようだ。大和と守は余りの殺気にその場に呆然と立ち尽くしていた。
この殺気は…キセキ…いや、それ以上…
佑助は必死で背中に手を回して剣を抜こうとしたが指先一本も動かなかった。ただ巨大な殺意に立ち尽くし死を待つのみの身となってしまったのだ。
「身体が…動かない…っ…佑助ッ」
守は俺に助けを求めているようだかどうすることもできない。完全な巨大機械兵となった部品達はその拳に握る刃渡り１０m以上の剣を守目掛けて振りかぶった。一瞬、硬直が解けたのかギリギリ致命的な怪我は回避出来たようだが守の腹を剣が見事に切り裂いた。
「ぐぁあぁぁぁあああっ！！」
辺りに真っ赤な鮮血が飛び散る。守はぐったりと倒れ込んでしまった。まずい…このままだと多量出血で最悪死んでしまう。
大和は返り血を浴びて真っ赤になっていた。それとは逆に顔面蒼白で目は虚ろで恐怖に染まっている。機械兵は続けざまに守に向かって動き出した。もう守に回避する程の力は残っていない。最期の一撃を決める瞬間だった。ガキンッ！！と激しい金属摩擦音が真空を揺らした。着地音と共に三人の前に立っていたのは偉大なる人物だった。

第七翼　最強の翼

「軌跡っ！！」
そう叫んだのは佑助だった。軌跡と呼ばれた青年は巨人兵の攻撃を易々と受け止めていた。その姿は傷だらけで巨人兵の剣を止める長刀すら所々欠けている。だが立派な顔立ちだけは変わっていなかった。凛々しい眼で巨人兵と目を合わせて囁いた。
「死ぬ覚悟は出来たか？」
それと共に巨人兵を優に越える殺意が身体から流れてきた。その殺意で人を殺してしまいそうだ。そして手に握られた２ｍ程ある白剣で巨人兵を切り裂いてしまったのだ。あまりの殺意で敵も一歩も動くことができなかった。またばらばらの機械片へと変わった巨人兵の身体…。辺りを支配していた強力な殺意は消えた。闘いが終わったのだ。

キセキは刀を懐に納めた。とたんに守に駆け寄った。
「大丈夫か、守っ！？…おい！！大和、応急手当だ！！」
すぐに大和は守に応急措置を施した。ここら辺は抜け目がない。
「止血は出来た…。意識は暫く戻らないだろうけど、死ぬ事はないでしょう。」
大和の言葉を聞いて安心したのか佑助に歩み寄ってきた。
「佑助…すまない…。心配をかけたようだ。これではリーダー失格だな…っ！！」
傷が痛むのか、腕を押さえている。
「あぁ軌跡さん！！貴方も手当てしないと！！」
大和が慌てて軌跡に手当てをした。佑助は軌跡に苦笑いしながら言った。
「そんなことありません、軌跡隊長。貴方がいなかったら今僕達はここにいませんでしたよ。本当にありがとうございました。」

続いて大和も言う。まだ少し目が虚ろだ。
「そうですよ…軌跡さんが自分を責めることもありません。」
軌跡は少し笑った。
「そうか…ありがとう。」
照れ臭そうに笑う軌跡の顔にさっきの殺意は全く見えない。レベルの差を痛い程感じる。「さて…この作戦のリーダーは…まぁ佑助だろうな…これからどうする？」
軌跡は佑助に問い掛けた。あくまでこの作戦のリーダーは佑助と決めているようだ。
「…ＧＣに帰還するのが無難かと…。守の意識もなく、隊長もこの怪我…。一度体制を整えるが一番と考えます。」
佑助の意見を聞いて軌跡は満足そうに笑った。
「流石、最年少でここに選ばれただけあるな。俺でもそうするだろう。」
大和も頷いている。
「それに…なにかここの基地はおかしいしな…。」
軌跡は意味深な表情をしている。
「と言いますと？」
佑助には言葉の意味が分からなかった。
「…いや、何でもない。とにかく今の俺達じゃあやはりこの基地は難攻不落の城だな。ではＧＣに戻ろう。」
とたんに佑助は申し訳無さそうな顔をした。この基地に突入時に宇宙船は全壊してしまったのだ。
「なんだ？佑助？どーせ守の奴が宇宙船で基地突っ込んできたんだろ？」
軌跡には全てお見通しのようだ。笑って見せた。
「あんだけ基地が揺れたんだ、それくらいわかるよ。…あっちに機械兵共が使ってた船があった。それで帰還するぞ。」

第八翼　隊長の翼

４月２２日ＡＭ１０：００
佑助は自分の部屋に戻っていた。誕生日ケーキを一人食べていたのだ。１８本並んでいたロウソクも役を果たしていた。やはり一人のパーティーなんてつまらない。佑助はあまり甘いものが好きじゃなかった。

――５時間前――
暗殺部隊がＧＣに戻ってきた。ここはセンターと呼ばれる場所で、宇宙船が出入りする言わばＧＣの玄関である。普段はあまり人もおらず、出入りする船も少ないのだが今日に限っては入口からはみ出る程の船で溢れかえっていた。先程佑助にも伝達があったが今日、最終防衛ラインＡが突破されたらしい。それでＧＣ内が慌ただしいのだ。佑助のいない間、第５番隊副隊長が指示を出していたようだが状況は悪化するばかり…。これでは隊長自ら防衛ラインに出撃しなくては…。
「６番隊は何をしてるんだ…？」
敵から奪った宇宙船を操縦している軌跡が呟いた。この混み具合は異常だ。これではＧＣ内に入る事すら出来ない。守の意識はまだ戻っていない。大和も床にぶっ倒れて寝ている。佑助は一人地球を見つめていた。俺が生まれた時の地球はもう少し青かったな…。
―佑助を乗せた宇宙船がセンターに入った頃には少し船の数が落ち着いていた。慌ただしく働く６番隊員の中に総隊長の姿があった。
　船から降りると総隊長が駆け寄ってきた。総隊長はボロボロになった暗殺部隊の面々を見てしきりに心配した。
「大丈夫か？とても心配したよ…。大和、すぐに３番隊を！！」
大和が寝ぼけ顔で頷いたかと思えば、すぐに３番隊員が集まってきて守と軌跡をタンカーで運んで行った。３番隊は救護・支援が主な

仕事である。ここの医療は旧時代の医学を遥かに越えるものを持っている。それは隊長が天才科学者の名を欲しいままにしたアノ大和隊長であることも大きく関係している。大和は御満足のようだ。
「流石、あのスピード。呼ばれてすぐ出る3番隊！！…カッコいいわぁ～。」
「確かに凄いよ。流石、3番隊員だな…。」
佑助は取り敢えず適当に返しておいた。
まぁ総隊長の意向で衛生兵はすぐに補充されるため常に欠員がないのだ。それならこのくらい当たり前と考えることもできるのだが。
その後、全隊長（軌跡・守除く）は集まり緊急会議を行った。
「どうなっている！？あの軌跡があんなにボロボロになって！予定と大分食い違いがあるんだが？」
そう会議を一言で始めたのは4番隊隊長光村氏。4番隊の主な仕事は司令・遊撃である。司令棟の管理は4番隊の役目だ。暗殺部隊の緊急帰還。軌跡・守の大怪我によって作戦にずれができたらしい。この4番隊の混乱、防衛ラインの突破…これらがGC内のパニックの要因となったようだ。佑助の管轄である5番隊は主に防衛ラインの管理だが、食い違いがあるのはこちらにも言えること。部下の報告によるとあと10日は防衛ラインAはもつはずだった。とにかく、佑助自身にも焦りがあった。もう時間がないのに…。焦っている佑助を横目に大和が立ち上がった。
「その件に関してですが、羽鳥隊長の容態は安定していて、藤咲隊長に関してはそんなに深手ではないとの事です。」
その一言を聞いて安心したのか総隊長はその巨大な体を持ち上げて言った。
「それは誠か？…よかった、よかった…。…と言って安心ばかりしている場合ではないな。光村隊長、ゼアールへの奇襲作戦への変更点の報告を。それによってはこちらの動きも変動するかもしれん。」
総隊長が席につくのと同時に4番隊隊長光村氏は立ち上がり今の状況について報告した。その後、今後の対策を全隊長に言い渡された。

それはあまりにこちらにとって不都合な内容だった。次に佑助の防衛ラインについての報告だった。
「えーっと…皆さん知っての通り、本日未明最終防衛ラインAが突破されました。残る防衛ラインはB・C・Dとなりましたが、副隊長の報告によると最終防衛ラインBに関してはまだ到達されていないとの事です。そこで2番隊、7番隊と提携を結んで戦闘員をいまでの2．5倍、武器は3．25倍にして防衛に当たりたいと考えています。報告は以上です。」
そう言い放って席についた。本当だったらこんな会議に参加している場合ではないのだ。今にでも防衛ラインBに行って状況を確認したいのに。でも今はどうでもいい第1、6番隊の報告に耳を傾けなくてはならない。佑助の焦りは頂点に達していた。
30分後にやっと隊長会議が終わりに近づたその時だった。GC内にゴトンッとなにか鈍い音が響き渡り、照明が消え会議室内にある巨大モニターが急に音をたてて起動したのだ。ざわめく会議室内…。
「何が起こったんだ!?2番隊隊長!!」
総隊長の怒声で静まりかえるざわめき。守の代わりに出席していた副隊長が状況報告を始めた。
「…どうやらなにかの電波障害による停電のようです。直ぐに緊急電灯が…」
その時、巨大モニターにZの文字が浮かび上がってきた。ゼアール星のシンボルマークである。するとなにか低く暗い声らしきノイズがとびこんできた。
「!?電波ジャックです!ゼアールからの電波、傍受しますっ!!」
GC内の電波が全て妨害されているようだ。さっきまで手元のヘッドホンに入っていた副隊長からの報告が聴こえなくなった。これはまずいな…。徐々にノイズからはっきりとした声帯が検出されだした。
「…にちは、GCの守護者のみなさん…

第九翼　魔術の翼

「…にちは、ＧＣの守護者のみなさん…。驚かせてすみません。ちょいと電波をお借りしてます。すぐにお返しいたしますので暫くの辛抱を…」
不気味な暗い声が空間を支配する。
「だっ誰だっ！？貴様は！！」
一人静まり返っている会議室内で怒声を響かせているのは、すぐに冷静さを無くすと有名な６番隊竹田隊長だ。電波をジャックしているだけなはずだから、相手から返事など…
「…あぁ、申し遅れました。私、ゼアール連邦軍代表ゴードンと申します。以後お見知りおきを…」
！！…返事があった…。と言うことはただの電波妨害によるジャックではないようだ…。新手の転移技術か？ゴードンど名乗った声の主は続けた。
「…もう皆さまお気づきでしょうが、これは電波妨害ではありません。強いて言うなら…そう！！旧時代的に言う『魔術』と呼べる類いのものでしょうか？」
その言葉を聞いて会議室内にどよめきが起こった。
「んなバカな話があるかっ！！」
まだ竹田隊長の混乱は続く…。
「ただのイタズラだ！！たくっ最近のイタズラは手が込んでいるから困る…。」
どうやら竹田隊長はあくまでも魔術を否定するようだ。だが周りはそうでもない。
「会議は終了だ！！」
と言って勝手に会議室から出て行こうとする。会議室内もかなり混乱している。
「ちょっと…状況確認も出来ていない中、個人行動は避けたほうが

…」
と言う2番隊副隊長の警告も無視して竹田隊長が会議室の扉を開けた時、
「うわぁぁあ！！なっなんだこれはっ！？」
隊長の悲鳴にも近い声が聞こえた。会議室がまた静まり返る。
「どうしたんだ、竹田隊長…全く…」
腰を抜かしてその場に座っている竹田隊長を起こそうとした1番隊隊長小野氏も扉の向こうを見たとたん悲鳴をあげた。
「なんだと言うんだ二人して！！」
それまで黙りを決めていた総隊長がついに口を開いた。すると小野隊長が顔面蒼白で答えた。
「扉の向こうがっ…おかしなことに…」
総隊長が自ら扉を開けて向こうの世界を見た。すると意外な反応が返ってきた。
「…ついに、魔術を完成させたのか…」
するとモニターから返事が返ってくる。
「…さすがＥＡＲＴＨ軍の総隊長…。話をすぐ理解してもらえ助かる。」
それぞれの隊長が各々扉の向こうの世界を凝視していく。扉の向こうにはそこにあるはずのＧＣの廊下は存在していなかった。紫と血のような朱、それに暗黒そのものの様な黒の絵の具が混ざった世界。まどろみの様…丸でこの会議室が別世界に迷い込んだような。その世界を支配しているのは殺意と恐怖、それに狂気…。宇宙の絶望を集めた世界…。
そんな変わり果てた世界に悲鳴を上げる者もいるが意外にみんなすんなり理解した。
佑助自身にもそんなに驚きはなかった。なぜなら前々から我がＥＡＲＴＨ軍も魔術に関しては研究を重ねていたからだ。だがそれは最新の技術でもまだ解明に至っていなかった。魔術の存在が確認された程度のもの。ましては軍事起用など有り得なかった。しかしゼア

ールの技術がここまで進んでいたとは…。
「やはり…私の研究は間違っていなかった…。」
…確かに大和は早くから魔術の力について独自の研究を行っていた。確か…治療技術に利用しようとかなんとか言っていた。しかしさっきの竹田隊長の様な人もいて思うように研究が進まなかったのだ。得体の知れないもの力に頼ることに抵抗があるのは分からなくもないが…。
「やっと皆さんに理解してもらえたようですね。まぁこのような時空を歪める魔術に関しては制御が余り上手くいってないため長いこと発動できないのが玉にキズですがねぇ。」
自分達の研究を敵に晒すなどゴードンと言う奴はかなりの自信家のようだ。それともこちらへの挑発か…。…何にしろこの世界から抜け出さない限りどうしようもない。竹田隊長は隣の席で怯えている。この人、肝心な時に全く役にたたないな…。
「安心してください。いきなり皆さんを皆殺し…なんて野暮なことはしませんから。」
くっ…部下と連絡がとれなくなってから暫く経つ。もしこの間にゼアールが攻めてきたら…ここで黙って敵の言うことを聞いている状態が居た堪れない。
「…要件はなんだ…。」
総隊長がモニターに語りかけた。
「要件だなんて。ただちょっとした約束をね…。」
7番隊副隊長と1番隊隊長小野氏が扉の前で武器を構えている。敵が強襲をかけてきたらとのことだろう。しかし魔術を使われたらこちらに勝利はない。最も付け焼き刃であることはこの会議内の隊長全てが分かりきっているだろうが。
「ふふっ…どうやら先程、特別暗殺部隊の方々にずいぶんお世話になったようで…。私もそのお礼がしたくなりましてね？今から言う場所に必ず来てください。あなたたちの時間で一週間後…。D－352星でお会いしましょう。ちょっとしたショーを見せますよ…。

ではまた…。」
その瞬間、モニターの電源が切れた。同時に会議室内を支配していたまどろみが消えてしまった。武器を構えていた2人が扉を開けたがそこはいつものGC内。どうやら空間魔術は解けたようだった。
その後、総隊長直々に各部隊に命令がくだった。総隊長が命令するなんてそうない。全隊長が一斉に会議室から出ていった。佑助に下された命令は防衛ラインの完全防衛。佑助は副隊長と話をつけ自分自身も参加することになった。
佑助の心配はムダとなった。防衛ラインに被害はなく、むしろ彼方の軍が弱っているように感じていたらしい。佑助はそれに違和感を感じられずにはいられなかった。この世界…何かがおかしい。しかしそんなことより今は防衛ラインの防衛…。これが第一だ。佑助はその考えをすぐに捨ててしまった。
―世界の歯車はもう動き始めていたのだ―

第十翼　休息の翼

あのゼアールの空間魔術攻撃があって以来、ＧＣ内の混乱と言ったら異常も良いとこだった。あれがあってから魔術の存在が世間に知れ渡る事なりそれ専用の専門機関までで き、防衛ラインへの攻撃に魔術が加わったことによりこちらの形勢は圧倒的に不利になった。これにより他の惑星から兵が召集されＥＡＲＴＨ軍の戦力は全て防衛ラインに集まることとなる。そのため暗殺部隊には特別指令として急な休息が下ったのだ。そのためと言うのも全ての指揮監が総隊長に移ったためだ。あのゴードンと言う奴の声を聞いてから総隊長に少しずつ焦りの色がみえていた。総隊長はＧＣ内で一番の心配症であったためあまり重要視されていないようだが、明らかに様子がおかしい。まるで何かに追われているような…。ゼアールの要件に関しては7番隊の生え抜き兵達が奇襲をかけることとなった。罠だと考えるのが当たり前だからだ。そんなあからさまな罠など仕掛けて何をしようと…？佑助には全く読めない。

守は確か今日退院だったような…。しかしこの混乱の中ではお見舞いになど行けるわけがない。しかも佑助が今居るのは、ＧＣ内で最も建設にかかった…遊園地にきている…。いや、遊園地と言う言い方は些か幼稚である。だがこの施設の正式名称は…

「いや～ユウとスペースバニーランド（ＳｐａｃｅＢｕｎｎｙＬａｎｄ）来るの久しぶりだね！楽しみ！！」

…恥ずかしすぎる…。何とも耳の長いうさぎさんがお迎えしてくれた。この遊園地のマスコットキャラクターらしい。そのうさぎを見つけるなり舞ははしゃいで飛び付いた。

「ねーねー、ユウ！！ちょっとモッチーと私、写真、取って！」

モッチーというのがこのうさぎの名前らしい。舞はテンションが上がりすぎて上手く言葉も話せていない。俺はテキトーに手元の小型

射影機で写真を撮った。しかし舞は不満そうだ。この射影機は機密文章を映すため敵にバレないように小型化しているがその分画質は荒かった。
「ちょっとユウ！！さっき渡したデジカメで撮ってよ！！なんでそんなダサダサカメラで撮るのよ！！」
…全く面倒な話だ。佑助はこれもまた舞が選んで佑助に与えた独特のセンスのショルダーバッグからデジカメを取り出した。デジカメの扱いなんてチョロいもんだ。普段敵地の中で機械をいじくっている佑助に取って生まれて初めて使うデジカメも瞬時に使い方を理解しカメラマン宛らの写真を撮った。映った彼女は満面の笑みだ。
「さっすがユウ！！使い方なんも教えてないのにこんな写真撮れるなんて！！やる時はやる男ねぇ♪さっ！！行きましょ！！」
全く怒ったり、誉めたり忙しい奴だ。しかしなんで久し振りのデートが遊園地なんだ…。俺は訓練所かなんかで新型の銃試用デートとかが良かったのに。そもそもこんな混乱の中、のんきに遊園地なんかではしゃいで…バカみたいだ。総隊長も何考えてんだか…

――二時間前――
「はぁ？こんな時に休息ぅ！？」
「おい、総隊長の前であるぞ。場をわきまえろ。」
あのゼアール魔術攻撃から三日たった今日、ＳｕｐｅｒＮｏｖａのメンバーは総隊長室に呼ばれていた。守を注意したのは総隊長秘書兼ＳＰのθ（シータ）。なぜ本名を名乗らないか不明。その横の質素なデスクに座っているのが総隊長。少し痩せたか？
「へぃへぃーわっかりましたよぅ…」
守の挑発的な態度。毎回のことだ。その守はというと会議室が別世界に飛ばされている間に目を覚ましたらしい。今はフツーに歩いている。それは軌跡も同じこと。あんな大怪我を負っていたのに三日で完治とは…。さすが大和。その大和を見ると少し得意げだ。
「…しかし、休息の命令とは？」

軌跡が聞いた。やはり気になる。
「いやさ、三日前にあんなことあって以来さ君達にはほぼ寝ずに働いてもらってたし…だからその休息。このまま働き続けたら君達、倒れちゃうよ？」
あまりの総隊長の平凡な解答にこっちが困っってしまう。
「それは有りがたいのですが、父上。今、この混乱の中で休息と言うものはいかがなものかと…」
軌跡の言葉に守が割って入る。
「そーだぜ、じぃ…じゃない、総隊長。今俺達が居なくなるのはGCにとっても防衛ラインにとってもメリットはないぜ？」
総隊長は笑って見せた。
「その件に関しては問題ないぞ。他の補充要員が1番隊から今日配属されたし、逆に疲れからお前らに死なれては本末転倒というやつだ。」
「しかし…っ！！」
軌跡はどうしても食い下がらないらしい。それを総隊長は掌で制した。
「…大和。例の報告を。」
そうすると今まで隅っこでじっとしていた大和が前に出てきた。
「はい…三日前から新設された魔術研究機関通称プロジェクトMですが、正直なところ研究は全くと言っていい程進んでおりません。先日のゼアールの魔術解析も始めておりますがいつ終わるやら…。」
おまけにふぅ…と小さな溜め息。
「大和…。」
口を漏らしたのは守だ。
「私は素直に休息が必要と一人の研究者として提言したまでですが。」
総隊長もうなずいている。
「…っとまぁそういう訳だ。いくら今日退院と言っても守は病み上がりだし、軌跡には雑用ばかりやらせていたからちょっとは身体も

動かしたいだろうし、佑助に関しては本当に不眠みたいだし、大和もこう言ってる。」
メンバー全員が唸った。佑助に異論はなかった。あくまで総隊長の命令は絶対。
「…ちぇ、久し振りに大暴れ出来ると思ったんだがなー。しゃーねー狙撃場にでも行くか…それぐらい良いよな、総隊長？」
相変わらず総隊長に対してラフな質問。
「私は休息の取り方までとやかく言うつもりはないよ。」
「だよなぁ、じゃーまた明日。」
守はそう言って部屋から出ていった。
「…私は素直に休眠を取らせてもらいますね。ではこれで。」
次に大和も。よく見るとすでにナイトキャップを被っていた。休む気満々か…。
「佑助、お前も休むと良い。あの働きっぷりからは疲れも想像できないがな。」
軌跡は俺に笑いかけてきた。なるほど…出て行けと…。佑助は前に出た。
「了解しました、総隊長。恐縮ではありますが休息を取らせてもらいます。」
くるりと振り向き扉に向かった。部屋から出るとき、
「もし、戦闘記録が残っていたら減給だからねぇ」
総隊長の声が聞こえた。考えはまるわかりか…。
「了解しました。」
そのまま、総隊長室をあとにした。

…しかしなぜ舞とスペースバニーランドなんかに来ることになったのかあまり憶えていない…。確か部屋に戻るとこまでは記憶があるのだ。だがそこから先が思い出せない…。俺も狙撃場に行こうとして…ダメだ。やはり思い出せない。思いだそうとすると頭がぼーっ

とするのだ。意識があったと確実に分かるのは舞と遊園地の入り口で手を繋いで並んでいた所から…。
全く何が起こってるんだか。しかしここまで来て舞に行くの止めるなんてきりだすのは不可能だった。だってあんな眼をされては…男と言うのはつくづく不憫な生き物だ。

「…い、おーい！！ユウスケ！！大丈夫かぁ～？舞の言葉で我に返った。ここは…？
「どうした？コーヒーカップでそんなに目ぇ回った？私、回し過ぎちゃったからなぁ…。本当に大丈夫！？リバースとかしない？」
舞は心配しているようだ…。
「んあ、大丈夫。ちょっと考え事をな。」
舞は怪しそうな顔をしている。疑っているのか…？
「もしかして…仕事の話とか？」
「いや、そんなんじゃないよ。」
「仕事の事とか取り敢えずは全部忘れなよ！！ってか今日は忘れて遊びまくるー！！って入り口んところで叫んでたじゃん？」
全くそんな覚えはない…。
「そうだっけか…？」
どうやら記憶が飛んでいる頃にやったらしい。俺が叫んだ？
「ユウってこんなに叫ぶんだぁってビックリしたよ？」
「はぁ…。」
そんな事ありえない。常日頃から自分の気配は消しているはずなのだから。暗殺ばかり仕事にしていたための職業病だが別に困ってはいなかった。もともと人前に出る事が苦手だったから。しかしその俺が叫んだ？あんな人混みの中で？やはり記憶にない。
「覚えてないの？」
舞はまた心配そうな目で見てきた。
「んあ、まぁな…。心配すんな、　ただの過労からだよ。…それより飯でも食わねえか？俺、腹減ってて。」

これ以上舞に心配をかけるわけにはいかない。俺は一刻も早くこの場から離れたかった。
「そう…？ならいいや！じゃあユウ、あそこのベンチに座ってて。私がお昼ご飯買ってくるよ。」
「いや、悪いよ俺が買ってくる。」
「ユウはなんか休んだ方がいいよ。ほら、早並ばないと！！」
舞にお使いに行かせるのはちょっと後ろめたかったが、ここは任せる事にした。
「じゃあこれだけ。」
佑助は舞に昼飯を買うには充分過ぎる程のお金を渡し、指定されたベンチについた。
周りを見渡すと宇宙で戦争中でもここには多くの人がいた。ここからイージス星は光速パイプで繋がっているためいつでも来ることができる。最も、GC本部内には入ることは出来ないが。
全くのんきなものだ。自分も人の事は言えないのだが。親子連れからカップルはたまた修学旅行生らしき集団の姿もあった。元々あまりイージス星にはゼアールの情報は伝えていないためあまり危機感を感じていないのかもしれない。ただ地球が危険と知らされ、ただ言われるがままにイージス星に避難したような。イージス星に行ったことはないが人工星とは言えほぼ地球と同じよな衛星らしい。そこには人類が望む平和な日々はあるのか。なんにせよこの平和も我々が守っていかなくてはならないのだ。なんて士気感に燃えている間に舞が昼飯を買ってきた。
その後も俺達は普通のカップルの様にデートをこなして行った。

第十一翼　純愛の翼

やがて日は陰りだし、夕焼けがロマンチックな景色を演出する。と言っても天井のモニターが映し出している架空の景色であるが。そんなことを言ったら折角のムードがぶち壊しだ。イマイチ「むーど」とか「ろまん」とかには鈍感な佑助もこの状況は壊したくないなと思えた。あまり手を繋いで歩いたりはしないが折角のデートだしたまには良いかなと左手を差し出した。舞はいつも俺の右側に来たがるのだ。なぜかは分からないが佑助の右半分は機械で出来ているため好都合だった。

舞は佑助が手を差し伸べていることに気付いた。

「ははぁん…。ユウが手を繋いだがるなんて珍しいわねぇ。なんかこの後どこかに連れ込もうとか考えてるのかしら？」

舞はニヤニヤしながら手を繋いできた。

「んな訳ないだろ…。第一、キスもしたこと無いのに、いきなり飛びすぎだろ…。」

すると舞は少し残念そうに言った。

「そうねぇ…実質5、6年の付き合いなのにねぇ…。あんたが草食系過ぎるから。」

舞はまたわけの分からない事を言っている。

「俺なんか舞の変わりようには驚きを隠せませんでしたぁ。」

ムッとして舞も言った。

「言うようになったわねぇ…。まぁ友達としての付き合いが長すぎたのかもね。」

…確かに舞とは一歳くらいの時からの幼馴染みだ。それは母と舞の母が高校時代の親友だったから。家も近所で毎日いっしょに遊んでいた気がする。だから舞は俺の過去をほぼ全て知っている。アノ事件で両親を亡くした日も舞は俺の隣にいた。俺が大手術をしたあの日も舞はずっと俺の無事を祈ってくれた。こうしてる今も俺の心配

をしてくれる。ちょっとめんどくさいところもあるけどそれはそれで舞の良いところなのかもしれない。
「…い！！ユウ！次、私たちの番だよ？」
また舞の言葉で我に返った。
「またぁ、やっぱ止める？」
俺達はこのスペースバニーランドで最も有名な観覧車に乗るため、並んでいた。
「いや…大丈夫だから。」
舞はやっぱり心配している。
「もう…しっかりしてよね！（こんなんで私を養っていけるのかしら…）」
「んあ？何か言ったかぁ？」
「なんでもない！ほら観覧車乗るよ！」
俺は舞に引っ張られ、観覧車に乗った。
中はさっきのモッチーだらけだった。さすが…。二人乗りらしく向かい合った席が一つしかなくとても窮屈だ。これじゃあ恋人専用みたいじゃん…。
「（ん…？）」
佑助は観覧車の床に落ちているチケットを拾った。舞は外の景色に夢中で気付いていない。拾ったチケットには
『幸せの恋人専用チケット』
と印刷されていた。舞は佑助がチケットを見ている事に気付いてすぐに佑助の手から奪い返そうとした。…しかし普段から戦闘慣れしている佑助からチケットを取り返すことなど出来るわけないのだ。
佑助はさっと舞の手をかわした。
「…なにこれ？」
舞の頬が急に紅くなった。頬が熱くなって今にでも破裂しそうだ。
「えっと…それはその…。」
佑助は目の前でチケットをまじまじと見つめていた。
「それはその…？」

舞は佑助に侮辱されているような気がしてきた。バカにしてるのだこの男は！！

「まっ間違って買っちゃったのよ！なんか文句でもある？」

「ふ～ん、なんだ間違いかぁ…」

「えっ？」

「俺はてっきり、この『てっぺんでキス写真撮影つき』が目当てかと思ってたよ。」

「なに言ってんの？バッカじゃない？自意識過剰にも程があるでしょ…全く。」

とは言ってみたの全く図星だ。ここの観覧車のてっぺんでキス写真撮影をすると幸せになれると言うジンクスがあるのだ。舞はそれを仕事仲間に聞いてやってみたくなった。

佑助は最近妙に私を避けようとするようになった…気がする。私が最近冷たくしているから？誕生日パーティーに遅れたから？…いや、なにか違う。そもそも佑助はそんな男ではない。…少なくとも私が知っている佑助は。じゃあ愛が減ったから？そんなはずはない。私は昔から佑助のことが好きだったし、これからもそうであると信じて疑わない。自分に嘘をついているわけでもない…。だがもし佑助がそうとは思っていなかったら？私がこんなにも愛していることを知らなかったら？…よく考えたらいつも自分の事ばかりで佑助の気持ちなんて考えたこともなかった。自分が佑助を好きでいれば良いんだと思い込んでいた。…でも分かってんなら最初から言ってくれればいいのに！！意地悪なやつっ！！

「…なぁ、舞？」

「ふぇ？」

心の中で悪態を吐いている間に話し掛けられたので、変な返事をしてしまった。またバカにされる…。

「ちょっと話、いいか？」

と予想していたが案外バカにしてこなくてちょっとガッカリした。

「いいよ、何？」
観覧車はゆっくり頂上に近付いていた。

佑助にとって舞はとても大きな存在だった。唯一、俺の過去を知っていて昔から付き合いがあったため、話もしやすかった。暗殺部隊に所属になってからと言うものあまり表に感情を出さなくなったが舞の前だけはありのままの自分をさらけ出せた。俺はいつの間にか舞を心の拠り所にしてしまっていた。このマフラーだってそうだ。だから舞に頼りすぎていたのかもしれない。今日のあれこれで改めて痛感させられた。
…舞に依存していると。
だから恋人…と言うより親子の様な関係になっていたのだ。それでも舞は俺を恋人のように慕い、こんなチケットを買ってまでキスをしようとしているのだ。これではお互いの気持ちに違いがありすぎる…。きっともっとこんなに重くなく、単純に舞を愛してくれる男はたくさん居るだろう…。それに俺はいままで数百の恨みもない人たちを暗殺してきた、殺人鬼…。こんな奴が恋愛なんてしていいのだろうか。いままで死んでいった同志に顔向けできない…。ここは切り出すべきなのだ。舞の幸せを考えての事だ。何も後悔なんて…して…いない。
「なぁ、舞…？」
「なによ、そんな暗い顔してぇ！！…まさかまた具合悪いとか…？大丈夫？」
自分がこんなんだからまた舞に心配をかけてしまう。
「いや…大丈夫だ…いつもいつも心配ばかりかけてごめんな。」
「なぁに、急に？ユウらしくないわねぇ？」
どうしたんだろう…今日はやたら空気が重い…。
「すまんな、本当に今までありがとう…」
なぜか目頭が熱くなった。
「？？本当に大丈夫？まだ頂上までちょっとあるけど…。」

よし、決心はついた…。

「舞、別れないか…」

第十一翼　純愛の翼（後書き）

戦争物なのに恋愛パートとか入っちゃってすいません…。
どうしてもみなさんに「舞」と言う人物に慣れ親しんで欲しかったのです。
これには深いわけがありまして
…まぁここからはネタバレなんであまり詳しい事は言えませんが、
舞はこれからのキーパーソンです！！←ネタバレセーフライン？
しかしこの恋愛パートが次回で終わり、その次の回からついに本格的な…（いやその次の回くらかも…）戦争物にするつもりですんで♪

これからもよろしくお願いいたしますm（__）m

２０１１．１２．３１．　　市野川　梓

第十二翼　永遠の翼

「舞、別れないか？」
その一言は宙に浮いて中々耳に入ってこなかった。まるでその一言が世界の時間を止めてしまったような。この狭い空間に二人と閉じ込められてしまったようだ。やがて舞は頭で言葉の意味を理解した。自分はフラれた。佑助に捨てられたのだ…。急になぜ？しかし私の佑助への思いも本物なのだ。自分の想いも聞いてほしい。…そうしたら考え直してくれるかもしれない。しかし口は言うことを聞かなかった。
「なん…で？…んでよ…？佑助ぇ…」
舞は泣いていた。佑助と下の名前で呼ぶのは子供の時以来だ。口が勝手に動くとはこの事を言うんだ。
「…。」
佑助は黙ったままだった。居た堪れない時間が過ぎていく。佑助は一向に口を開こうとしない。時間がやけにゆっくり流れているように感じた。
その静寂を破ったのは、ゴンドラ内に流れたアナウンスだった。
「さぁ、もうすぐてっぺんだよ！モッチーがカウントするから良いポーズをとってね！」どうやらもうすぐ頂上らしい。だいぶ地上から距離ができていた。夕陽が丁度、作り物の海に沈んでいくところだった。そしてこれは頂上でキス写真を撮るためのアナウンスのようだ。当然そんな気にはなれない…。
「3…2…1…ハイ、ポーズ！」
そのアナウンスと同時にシャッター音。虚しくもそのシャッターは無駄になった。ただ黙っている男と泣いている女の子を撮影しただけ。アナウンスは続いた。
「わぁ…綺麗に撮れたよ！ゴンドラから降りたら受付に写真、取りに来てね！」

愉快な声が無くなったとたん、また静寂が空間を支配した。夕陽が沈みかけている。海がオレンジ色に染まっている。
暫くすると舞が口を開いた。
「…わっ私は佑助がっ…大好きだよ…？」
舞は涙を堪えて今まで伝えられなかった佑助への想いを素直に伝えた。それは偽りのない真実の愛だった。佑助は黙って聞いていた。結局、私の想いを佑助は分かってくれたのだろうか？
その後、佑助も舞への思いを素直に伝えた。舞は泣きながら聞いていた。声を出さずにずっとすすり泣き…。舞の膝の上は泪でびっしょりと濡れていた。

やがてゴンドラは地上に着いて二人は遊園地の出口に向かった。写真はもちろん取りに行かずにすぐに観覧車から離れた。お互いの思い伝えてからと言うもの一言も言葉を交わしていない。出口へ歩いている二人の間には微妙な空間があった。舞はずっと俯いたまま、佑助は柄でもなくぼーっと何も考えずに歩いた。いつの間にか夕陽は沈んで辺りは暗くなった。その暗さの中でライトアップされた照明が綺麗だ。佑助が溜め息を吐くと急に舞が立ち止まった。
「ねぇ…？折角だし、イルミネーション観に行かない？」
佑助はこのまま遊園地から出るつもりだったため多少面食らったがいまできる最大限の笑顔を作って、
「うん。」
と一言。イルミネーションは出口の近くの噴水広場でやっていた。中にはカップルもいたし、気まずい。舞は近くのベンチに腰掛けた。イルミネーションを観ているのか…？
「…私たち…これからどうなるの…？」
舞はなるべく周りのカップルに聞こえないように気遣い小さな声で呟いた。すると佑助は舞を背にイルミネーションを前に観ながらそっと言った。
「このままさ…ずっとこのまま…。」

このまま？それって…？
「…恋人のまま…ってこと？」
また考える前に口にでた。佑助は考え直してくれたのだろうか。
…そんな儚い希望はすぐに砕かれた。
「親友のままってことさ。」
…親友？佑助はまだ私達が恋人同士で無かったとき、私達の関係を「親友」と表現したことがあった。その時はどういう意味か深く考えなかったが、今はとても引っ掛かる言い方だ。舞は慎重に聞いた。
「親友って…？」
佑助は少し考えてから言った。
「家族同然の友達…ってことかな？俺もあんまり深く考えた事ないけど。」
舞はまた泪が出てきそうだった。だがここで泣いてしまったら佑助を傷つける事になる。舞は必死で泪を堪えた。
「これからも…親友？」
佑助の肩が少し震えているように見える。佑助もやはり辛いのだろうか？
「あぁ…。親友だ。俺は舞が助けを求めてくればどんな所からでも駆けつける。だから舞も俺が困っている時は側にいてほしい。…これが恋人としての最後のお願い。」
舞は最後と言う言葉を聞いてついに泣いてしまった。またすすり泣き…。しかし佑助は振り向かなければピクリともしない。ずっと舞に背を向けて動かないままだった。佑助はまだ黙っている。舞は気が落ち着いてから
「もっもちろん！！」
ちょっと強気で、でも寂しそうに言った。
「良かった…。」
佑助は安心したように言葉を口にした。舞にはどんな気持ちで佑助がいるのか分からなかった。ただ一つ分かるのはこれからも私は佑助を愛し続けるということだけだ。

きっと、永遠に。

第十三翼　鬼気の翼

――ＡＭ３：３０　第５番隊長室内にて――

まだ眠い…。それはまだ朝の三時半であるのであるのだから。いや、どちらかと言うとまだ夜なのか？宇宙での暮らしに慣れたせいかあまり昼とか夜ということにあまり興味を示さなくなった。まだ寝てて良い時間だ。廊下からは早朝出勤の隊員の声が聞こえてくる。全く良い迷惑だ。折角の貴重な睡眠時間を邪魔してくれる。佑助がまた寝ようとすると、すぐ枕元の通信端末に連絡がはいった。佑助は眠気声で返事をする。何だって言うんだ…。電話の向こうの声の主はすぐに分かった。

「おう、佑助か？夜遅くにすまんな。」

電話の向こうも少し眠そうだ。

「…？一か？どーした？」

一…第一番隊隊長小野一。一番隊は主に戦闘兵の訓練や管理を行っている。正規の軍員は既に戦闘、教育課程を修了しているためあまり一番隊とは関わりをもたなくなる。佑助も例外ではなく一番隊に知り合いは少ないが自分が宇宙警察入所当初、世話になった一とは多少の交友があった。

「いや、なんかなぁ…副隊長がノーバのメンバーに様があるらしいんだよ。」

一番隊の副隊長と言えば…嫌な記憶しかない。ＧＣ内では軽い有名人だ。…鬼教官としてであるが。

「えっ…おっ鬼越副隊長が？」

佑助は全身から汗が吹き出てきた。そうとうなトラウマが有るらしい。

「まぁな…行かないともっと酷いことになるだろうよ。」

一もあまり鬼教官が好みではないらしい。

「うっ…。」

…どうやら行かなくてはいけないようだ。確かに行かなかったら、何をされるか分かったもんじゃない。佑助は了承の意を伝えて通信切った。なんでも４時半にエントランス集合らしい。今から急いで準備しなくては間に合わない。戦闘出撃時以外は普段そんな重装備をして出掛けないが、相手は鬼教官である。いつ、何時でも装備に気を抜かないのが基本である限り佑助は基本を忠実になった。

服装の乱れもなくし、装備は完璧。準備に余念がない。部隊長の証であるキャップを深く被り部屋をでた。見た目は宛ら、新入兵だ。こんなにきちんとした服装で外にでるのは久しい。佑助がエントランスに着く頃には他のメンバーは既に集まっていた。まだ時刻は４：２０…時間前行動も基本中の基本。もっともこんなに早く来る必要はないが。メンバーの服装もやはり、きちんとした正装だ。大和に関しては継ぎ接ぎ白衣以外の服装を見たのがもう数年ぶりに感じる。エントランスには俺たち以外の兵はいない。静かなものだ。すると守が佑助に気づいて近付いてきた。こいつ、普段は遅刻の常連なのに今日に限っては俺より早い。守も装備に余念がなく、完璧な軍服の着こなし。

「よお、佑助。今日は最悪の一日になりそうだな…。」

守も鬼教官にしごかれた身だ。その反応は平常である。

「だな…。」

佑助はあくまで鬼教官への恐怖の念を表に出さなかった。

「…気づいたか？軌跡…、余裕だぜ？」

軌跡が…？何だと言うのか。佑助は壁際で外の防衛ラインの様子を見ている軌跡の方向に視線を向けた。

「！！マジかよ…。流石だな…。」

佑助の目線の先に居た軌跡はいつもと同じ制服をちょっと着崩したラフな格好だった。全く、正装する気など感じさせない表情。

「まぁ、確かに軌跡には手を出せないわな…。」

守は羨ましそうに軌跡を見ていた。まさか鬼教官の前でその格好とは…。佑助は改めて軌跡の強さを感じた。

しかしそれもそうだった。軌跡は唯一、鬼教官に勝利した卒業生なのだから。
第1部隊の戦闘課程を修了時に鬼教官と本気の組み手をすると言う恒例行事がある。いくら正規の隊員になったとは言え、相手は鬼教官。圧倒的な差で負けるのが普通であり、後に暗殺部隊に所属となるメンバーだって当然負け越していた。
元々は鬼教官への日頃の鬱憤を晴らすために始まった行事だったが今や鬼教官の一方的な暴力を受けるだけのものとなっていた。ほぼ確実に負傷すると言う恐怖の行事。しかし軌跡はその行事において鬼教官に絶対的敗北を味わせたのだ。教官は全治半年と言う大怪我。噂に寄れば軌跡はなんの躊躇いもなく教官の腕をぶった切ったらしい。それは伝説となり今も軌跡は最強の戦士として名を馳せている…。考えれば軌跡の伝説はあそこから始まったのかもしれない。軌跡の代以降素手のみとなったのは有名な話。そんな敗北を記した鬼教官も軌跡には口出しが出来ないのだろう…。軌跡もそれを分かってやっているのだ。
「おい…集まれ。」
どこからともなく地を這うような声が聞こえる。そして感じる圧倒的な殺気…。間違いない…鬼教官だ。エントランス奥の廊下からゆっくりとこちらに向かってくる。身長は2m近くあり、体つきはまるでゴリラのよう。メンバーの間に緊張が走った。…軌跡を覗いて。やがてエントランスにやってくると軌跡を横目でチラリと見て軽い舌打ちをした。軌跡は余裕の表情、流石だ。
「…こい。」

鬼教官が連れてきたのは、第4戦闘場。GC内でもっとも広い空間であろう。昨日行った遊園地の5倍はある。そこに着くなり教官はすぐに壁にモニターをだした。
「この前、お前らがゼアール星に行った時の報告を小野隊長から聞いた…。」

すごい殺気だ。軌跡とそう変わらない。
「たるんでんじゃねーのかぁ？…俺が考えた結果、お前らにはこれから殺し合いをしてもらおうと思う。…マジのな。」
一行は一瞬戸惑いを見せた。意味が分からん。
「勝ち抜き方式でワンマンでの殺し合い。んで勝ち残った奴が俺と殺る。」
…こいつ、バカか？そんな事したら軌跡が勝ち残るに決まっている。そんなの軌跡の勝利は目に見えている…。…いや、それが目的なのか？
「流石にお前らが本気で殺し合いをすると死者がでるので、相手に一滴でも血を流させた方の勝ちとする。…良いな。」
佑助は鬼教官が何を考えこんな事を行うのか見当がつかなかった。なにか策でも有るのか？…しかしここを卒業してからさらに俺達は強くなっている。それも暗殺部隊だぞ？…悪策も良いところだ。守も大和も黙りをきめている。軌跡に関しては既に話にすら入ってきてない。
「…では、一回戦…。藤咲対…武蔵っ！！」
軌跡と大和は戦闘室に残り、残りは隣のモニタールームに行った。このモニタールームから戦闘室に設置されたカメラの映像を観ることが出来る。カメラに映った二人の顔は真剣そのものだ。軌跡は背中に長剣を一本のみ。それに対して大和は重装備だ。
「やっぱり…軌跡の勝ちかな？」
守が話し掛けてきた。…まぁそうだろうな。いくら俺達が暗殺部隊だとしても軌跡はその中でも別格なのだ。
「しかし、良い勝負になるんじゃないか？」
戦闘室はバーチャルシステムを採用さているため周りの環境をすぐに変更する事が出来る。カメラの向こうは猛吹雪が吹いているのだ。佑助たちには見えないが。
「では、始めよう。」
鬼教官がマイクに向かってコールした。途端に二人の姿は消えてし

まった。暗殺部隊に所属している限り殺しは人にバレてはいけない。そのため身を隠す技術に長けているのだ。どこに身を潜めているかカメラから見ても分からないのだから吹雪の中では尚更だろう。
　軌跡は基本的に長剣以外の武器を持ち歩かない。それは動きやすさからだと言うがどうやらそれ以外の理由があるらしい。どう見ても暗殺に向く道具ではないが軌跡ぐらいの技量になると別に長剣だけで対処出来るのかもしれない。
それに比べて大和は飛び道具を多用する。特にクナイや手裏剣などの古風なものが多い。普通、それ単体ならそれほど殺傷力はないがアイツは薬物に精通してるため、勿論道具には毒薬、もとい劇薬が刷り込まれている。そのためちょっとした傷も大和によるものであれば命を落とすこととなる。
どちらも怪我では済まされないと思うのだが。カメラの映像が切り替わるとそこでは二人の戦闘が行われていた。しかし普通の武器のぶつかり合う戦闘ではなく一撃、二撃攻撃したらまた暗闇に消えて相手の出方を見ると言うなんともビビりな戦闘である。
しかしこれも俺達が暗殺部隊である由縁。ムダな戦闘は避けるのだ。なるべく一撃で殺せるように常に相手の動きを追って一瞬の隙をつく。相手に姿を見せているようではまだまだだ。

大和と軌跡の戦闘は続く。

第十三翼　鬼気の翼（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年も銀色の翼をよろしくお願いいたします。
…って言ってもまだ十四話ですけど…。

…すいませんちょっと予定を変更してもう少し暗殺部隊の戦い方について掘り下げようと思います。暗殺部隊なのに中々暗殺していなかったので…。

本格的な戦争シーンはもう少し先になりそうです。もう少し、話が進んだらあと書きかなんかで登場人物の紹介でもしようかと考えてます。

ではこれからもよろしくお願いします。

２０１２．１．１
市野川　梓

第十四翼　鮮血の翼

依然として軌跡と大和の戦闘は続いていた。軌跡が手を抜いてるのかと思われたが画面の向こうの軌跡はそうは見えなかった。互いに手加減している様子はない。少しでも気を抜いたらすぐにでも殺されてしまうだろう。佑助は横目で鬼教官を見たが何を考えているのか読み取ることはできない。分かることと言えば右肩に大きな傷痕があることぐらいか。守の瞳は真剣そのものだ。この後にある佑助との模擬演習に緊張してるのか、気が立っている。佑助に緊張の色は全くない。あるとすれば鬼教官への畏怖の念。

少し佑助がモニターから目を反らした時だった。モニタールームに低いブザーの音が響き渡った。戦闘が終了したのだ。鬼教官がマイクに向かって叫ぶ。

「模擬戦闘、終了。…勝者、藤咲！」

やはりか…。モニターを見ると大和が仰向けに倒れて、軌跡が横に立って大和の顎に向かって長剣を突き出していた。その剣先に一滴の血が付着している。よく見ると大和の顎に小さな傷が出来ていて傷から少し血が垂れている…。

大和は呆然と倒れていた。軌跡はそっと血を振り払って、腰の鞘に剣を納めた。そして大和にてを差し出す。大和はふっと笑って軌跡の手をとった。軌跡も笑顔だ。

二人がモニタールームにやって来た。鬼教官は立ち上がり二人を見つめている。

「…及第点だな。…次、羽鳥対、広瀬！」

佑助と守は席から立ち上がり戦闘室に向かった。後ろから軌跡と大和の応援が聞こえた。

もし今までの戦闘データから勝敗予想するならこの戦いの勝率は五分五分だ。守は佑助より二年先輩であるが、佑助も最年少でＳｕｐｅｒＮｏｖａにスカウトされた実力者だ。守は実戦向けの戦闘兵で

あるため少し佑助が有利かもしれない。しかし守は昔、7番隊にあるエリート兵のみを集めた強襲チームリーダーをしていたと言う経歴の持ち主だ。油断は出来ない。佑助と守はスタンバイポジションについた。

「手加減はなしだぞ。全力でこい！」

守が叫んだ。もちろん、自分もその気である。それに少し軌跡と模擬演習をしてみたいという気もする。ここは本気でやらなければ守にも失礼だろう…。鬼越の声が聞こえる。

「想定フィールドは砂漠だ。」

声と同時に周りの景色が砂漠になった。足元には砂があり、頭の上には疑似太陽が存在している。本物の砂漠宛らだ。額からは汗が溢れてくる。早く決着をつけなければ脱水症状か熱射病になる…。

「では、はじめっ！！」

合図と共に姿を消した。正確には迷彩スーツを着ているだけで身を隠した訳ではない。これで簡単には姿を見られる事はない…。しかし同時に守の姿も見えなくなった。…どこから仕掛けてくるのか分からない。…全方向に気を使わなければならない。

守は強襲兵であったためか、バイソンと呼ばれる巨大な拳銃を基本的に武器として使っている。そのためどんな距離からでも攻撃される危険性がある。発見されない事がなにより大切だ。しかし守の姿は見当たらない…。

とその時だった。佑助の足元には弾丸が飛んできたのだ。佑助は慌てて近くの岩に身を隠した。流石、エリート兵。姿は見えなくても気配で相手の場所を確認する事が出来るのだろう。佑助も相手の殺気を感じる事が出来るが、相手は暗殺兵。殺気を消すことなんて造作もない。少なくとも近くに気配はない…。ここは相手の出方をうかがうしかない。

灼熱の砂漠に静寂が訪れる。天井に浮かぶ太陽が二人の体力は徐々に削っていく。暫くすると徐々に砂漠に竜巻が出現しだしだため周りの視界が悪くなった。しめた！これはチャンスだ。佑助は素早く

音爆玉と呼ばれる特殊な高周波を発する玉を周りに埋めた。すると人間には聞こえない高周波が発せらる。佑助は何か複雑な機械を取り出し操作しだした。佑助は途端に走り出し、暫く移動してからいきなりたちどまると砂丘に手榴弾を投げ込んだ。間もなく爆発して砂が辺りに飛び散る。火薬の匂い…。
またどこからか弾丸が飛んできたが今度は小型ナイフで弾を真っ二つにしてしまった。佑助は背中に背負ったスナイパーライフルを構えるとすぐに標準を合わせ引き金を引いた。その途端にブザーが鳴り響く。鬼越の声が聞こえる。
「模擬戦闘、終了。勝者、広瀬！」
周りの砂漠が消えていく…。いつの間にか全身汗まみれだ。３００m先に倒れた守の姿が見える。佑助は直ぐに駆け寄った。
「大丈夫か？」
守の右頬から血が流れている。予定通り、弾丸はかすめただけのようだ。守は笑っている。
「やっぱ…作戦か…」
佑助は頷いた。
「あんなに気配消さないなんていくら何でもおかしいなって思ったんだけどな…。」
手を差し出した。守は手をとって立ち上がり頬の血を拭った。
「へへっ…戦場だったらお陀仏だな。…負けんなよ！」
守は佑助の背中を叩いてモニタールームへ向かった。それと同じく軌跡がこちらに向かってくる。凛々しい顔立ちだ。佑助も額の汗を拭った。
「広瀬対、藤咲。勝った方が俺とタイマンだ。」
天井から暗い声が聞こえる。軌跡は佑助の肩を叩いた。
「肩の力抜きな。…いざって時、身体動かねぇぞ。」
しかし目は真剣そのものだ。殺気も十分。
守のためにも負ける気はない。佑助はスタンバイポジションについた。

「想定フィールドは…高層ビル郡だ。」
とたんに高層ビルが出現した。佑助の足元にも出現して高度をあげた。ざっと地上５０ｍ程の高さだ。
「では…はじめっ！！」
佑助の戦いが始まった。

…うっ…ここはどこだ…？
佑助が目を覚ますと目の前には天井があった。どうやら自分の部屋の様だ。横を見ると大和の姿があった。にっこりと笑っている。
「や…まと？なぜ俺は…」
「喋るな。まだ安静にした方がいい。」
俺はなぜ自分のベットなんかで寝ている？…思い出せない。大和はゆっくりと語りだした。
「一時的に記憶が飛んでいるだけだ。暫くすりゃあ戻る。」
記憶が飛んでいる…？なぜだ？
「お前は軌跡と模擬演習をやったんだ。…良いところまでいったんだがな…。まぁ相手が軌跡じゃあ部が悪い。鬼越教官も満足げだったし充分じゃないか？」
俺と軌跡が？全く記憶にない。そういえば最近記憶がよく飛ぶことがあるがそのせいか…。
「安心しろ。軌跡も首へは峰打ちしかしていない。頬の傷もすぐ消えるさ。」
佑助はそっと左頬を触った。ガーゼがしてある。痛みは…ない。
「明日、午前１０時から部隊長会議だ。…さてユウも目を覚ましたし俺はおいとまするかな。」
大和は立ち上がり、佑助の部屋から出た。
一時的に記憶が…ねぇ。ふと枕の横に目をやると映像再生端末が置いてある。なんだ…これは？
「なんだ！？貴様らっ！！」

突然、外から大和の声が聞こえた。何か慌てているようだ。侵入者か！？
「大和！！どうした！？」
大和からの返事はない。佑助はベットから立ち上がり手元に置いてある拳銃を構えた。まだすこし頭に鈍痛が残っている。額から冷や汗が垂れ…徐々に扉に近づいていく。その時だった。
「動くな。」
突然背後に人の気配がしたが、すぐに佑助の意識は飛んでしまった。

第十五翼　記憶の翼

佑助は昔からそんなに目立つ子ではなかった。普通の家庭に生まれ、ごく一般的な生活をおくるただの少年。裕福な家庭とは言えなかったが別に貧乏と言う程ひもじい思いもしたことがない。やはりそれなりの家庭環境の中で育った。

父親は宇宙警察に勤務し、正義感が強くどんな悪事も許さなかった。佑助に所謂親からの束縛はなかったが、どんな小さないたずらもすることが出来なかった。佑助もそれに反抗することもなかった。生まれたときから正義に溢れた環境に居たため、悪事を働く気にすらならない。

母親は専業主婦であり、佑助を常に見守る優しい母だった。佑助が一人息子と言うこともあったが、母は佑助に無償の愛を捧げた。佑助もそれに答えるように誰にもでも分け隔てなく優しい子に育った。

佑助が産まれた頃は第三次世界大戦の真っ盛りだった。ある国がゼアール星と手を組んで地球を牛耳ろうとしていると言う噂が流れたのだ。結果論であるがそれはゼアールの綿密な情報操作によるデマ情報だった。日本もアメリカなどの列強と手を組んで、ゼアールと交遊関係があると噂されたイギリスに宣戦布告した。当時、戦争に反対する政党もあったがゼアール星の正体が全く解明していなかったため人々はそんな未知の存在に恐怖し排除しようとした。そのため日本も戦場となった。そのため日本人の大半はアメリカに疎開し暮らしていた。アメリカは全く戦争に影響されなかったため人々は戦前と変わらない生活をおくっていた。

佑助の父親はイギリスが本当にゼアールと協定を結んでいるのか、真偽を確かめていた。当時、宇宙警察はＡＣＰと呼ばれるただの宇宙研究機関であったため、ＧＣの様な立派な施設はなく、日本に小さな天体観察施設が在るのみだった。ゼアールの存在は既に確認されていたが人々はその存在を否定し続けた。まるで恐怖から逃げる

ように…。ＡＣＰは世界政府と呼ばれる連合国側の最高機関にゼアールの力について危惧すべき力だと主張し続けた。しかし世界政府は断固として耳を貸さなかったのだ。
佑助の父親は世界政府に戦争を止めゼアールへの対策を練るべきだと、世界が一丸とならなければならないと言う考えを胸に日本に残り、ゼアールについて研究し続けた。
佑助はそんな父親を憧れ尊敬していた。父親には数年に一回しか会えなかったがアメリカで母と二人で生活をおくりながら、ＡＣＰに入る努力をしていった。
　佑助が中学に入学する頃には戦争は終わっていた。人々は母国に帰り家族との再開を果たした。日本は幸いにもあまり戦場とならずにすんだ。しかし長い戦争の中心地となったヨーロッパは壊滅し、人が住める環境ではなくなった。
世界もやっと平和になり人々が世界の復興を願い始めた頃、悪夢が訪れた。

４０ＸＸ年７月７日
その日は唐突にやって来た。七夕であったため人々は世界の復興を願っていた。佑助も世界がいつまでも平和であるようにと短冊に願う。しかしそれは叶わなかった。突然、ゼアール星が地球に侵略し始めたのだ。ゼアール兵は人々を見殺しにしていった。あまりに突然であったため、ＡＣＰも世界政府も対策が練れずに人口は衰退の一途をたどった。人々は絶望に打ちひしがれ死んでいった。今ある既存の兵器が全く聞かないのだ。しかも第三次世界大戦終結直後だったため、戦力差が目に見えていた。世界は混乱の渦に巻き込まれていた…ゼアールは初めからこれが狙いだったのだ。人間同士に殺し合いをけしかけ弱ったところを侵略する…。佑助の父親の見解は正しかった。
お陰で世界の人口は四割まで減少した。もう後がない…。そう考え

たＡＣＰは極秘裏でイージス星と呼ばれる人工星を作り始めたのだった。
ゼアールは地球人を全て駆逐すると思われていた。しかしある日を期にゼアール兵は撤退していった。が地球に残った爪痕は大きく、地球はもはや人の住める星ではなくなった。世界政府の信用はなくなり、ＡＣＰに飲み込まれる形で合併した。
佑助はここで身体の半分を無くすことなる。…それだけでなかった。両親が死んだのだ。一緒に逃げていた友達も死んだ。佑助は一人機械人間になる事を決意した…ゼアールに復讐するために――――。

第十六翼　復讐の翼

先の見えない闇の中でズキッと鋭い激痛が腹部に伝わる…。佑助は痛みに耐えながら眼を開いた。眩しくて開けづらい。
目を開くとそこには星の数ほどの機械兵とZと書かれているお面を被った人型の生物…。はっとなって横を見るとそこには無惨な姿の暗殺部隊の面々があった。みんな手首と足首を巨大な釘で十字架に止められている。頭から紅い液体が次々へと流れ、腹の辺りが血だらけだ。俺以外には人工呼吸器がついていて敢えて生かしているような感じだ。自分の手足と腹を見るとそれは同じ状況だった。手足はすでに感覚がない。まだ腹の激痛は止まることを知らない。
　佑助が状況確認をしていると、お面を被った生物が前にでて喋りだした。
「いやはやっ！これはこれは…。特別暗殺部隊ＳｕｐｅｒＮｏｖａの広瀬佑助さん。手荒な真似をして申し訳ない…。それにしてもすごい姿ですね…。くくっ」
叫ぼうとしたが声がでない。どうやら声帯を潰されたようだ。喉がやけに熱い。
「おっと…声が出ないようですね。どうしたのでしょう…大丈夫ですか？」
お面を被っているため表情が読めない。それにしても随分バカにしたデザインである。奥の機械兵達はピクリとも動かず整列している。こんな時に眠気が…。
…やっと状況が読み込めた。ここは多分ゼアールだ…。周りに機械的な建物しか立っていない所をみて間違いないだろう。奴が…ゴードン…。奥の兵の数…勝ち目はない。
「その通り。私がゼアール最高司令官、ゴードンです。」
読心術習得か…。ゴードンは機械兵ではない可能性が高くなった。機械兵に読心術なんて出来る感情はないはず。すると…奴は何者だ？

「さぁ…何者でしょう？」
ゴードンはお面を外した。中からは機械兵の顔でなく人間の顔が見えた。宇宙空間で息をしている…まるで自分を見ているようだった。年齢はまだ若く髪は黒髪…アジア人系の顔立ち…。体格は平均的な体つき。
暫くすると視界が霞んできた。あまりの大量出血によって意識が朦朧としてきたのだ。もう長くはもたない…。
「おっと、貴方の命も風前の灯ですねぇ。」
逃げ場がない…例え逃げる事ができてもこの傷ではとても太刀打ちできない。佑助以外のメンバーはまだ気を失ったままだ。誰か…っ目を覚ましてくれ…！
ゴードンは冷たく言い放った。
「もういいや。片付けてくれ、グロー。」
そこに突然現れたのはこれまた若い銀髪の青年だった。それと対比するように瞳が真っ赤である。そのグローと呼ばれた青年は巨大な斧を取り出した。ギラリと光る刃は血で染まっている。いままでその斧で何人の人々を葬ってきたのだろうか…。
グローは佑助の張り付く十字架に近付いた。まずは俺か…。グローは斧を振り上げたが佑助は眼（まなこ）を閉じることをしなかった。よく見ると斧の刃が細かく震えている。殺しに躊躇しているのか？しかし佑助には動く事は愚か声を発することすら出来ない。自由は完全にない。
グローは顔を伏せて殺す瞬間を見ないようにしていた。銀髪に血が垂れていく…。
するとグローは決意した様にその瞳を佑助と合わせた。さっきまで赤かった瞳がいつの間にか真っ黒になっていた。その瞳は殺意そのものだった。グローは斧を振りかぶった。
佑助は生まれて初めて死を悟った。もう逃げることは出来ない。いくら今まで幾度となく修羅場を越えてきた兵と言えど死の恐怖から逃げることは出来なかった。ついに佑助はついに瞳を閉じて死を仰

いだ。死ぐらい楽に迎えたかったな…。
「終わりだ。」
グローは冷たく呟いた。辺りに紅い鮮血が飛び散って佑助は意識を失った。
俺の人生はここで終わった――。

第十七翼　刹那の翼

―ＧＣ、総隊長室にて―

いくら呼んでも暗殺部隊の面々はコロニーへは来なかった。昔から私は心配症であったため嫌な予感ばかりして冷や汗が額から流れる。こんな私が今や地球、人類の命運を握っている事など本人すらあまり自覚が無い。人類最強の戦士だと讃えられ伝説の戦士として世に名を知らしめた事もあった。があれは人々が勝手に作り上げた偶像崇拝なのだ。ゼアールに恐怖し助けを求めた人々がそれから逃れるために仕立てられた偽物のヒーロー…。あのゼアールのＧＣ中枢部へのハッキング以来正直、焦りが隠せなくなった。もうゴードンは魔術を復活させたのだ。はっきり言って今人類に魔術に対抗するすべはない。今ゼアールが奇襲をかければ尽く人類は壊滅してしまうだろう。…しかしまだ人類は生き残っている。私は人類の長である限り人類を絶滅から身を呈して助けると決意したのだ―。

あの悪魔の七夕…昔の私は愛するひと一人も救うことが出来なかったのだ。

優…。どれだけ謝っても戻ってはこない。ピアノの才能に長け、世界…いや宇宙で活躍すべき人だったのだ…。しかし彼女は私の目の前で瞬きをするのより早く未来を奪われた…。自分の無力さを呪った。自分は何のために生きているのか…これから何を愛して生きていけばいいのか…。

よく考えたらあの時に私の人としての時間は止まってしまったのかもしれない。

総隊長が一人焦っていると室外から連絡がはいってきた。慌てて受話器を取る。

「こちら、ＥＡＲＴＨ最高指令部。どうだった？」

通信の声の主は慌てているように早口で応えた。

「そっそれが…大変なことに…。」

心臓の鼓動が高鳴る。
「どっどうしたって…？」
思わず声が震えてしまう…あの悪夢が脳裏を過(よぎ)る。
「それがどの部屋にも暗殺部隊の方々の姿がなく…。」
「それで…？」
「しかし部屋には何も争った様子はありませんでした…しかし面々の残された携帯端末に暗号の様なモノが…。」
画像が転送された。この文面は…。
「我々には何を意味するのか…さっぱりで。あと…各部隊長の武装が残ってました…。」
この暗号は暗殺部隊しか使用しない文面だ。４人とも緊急コールを同時刻に送信している…。そして内容は
「ゼアール　奇襲　助け　求める」…。
間違いない…ゼアールの奴らはＳｕｐｅｒＮｏｖａのメンバー全員を拘束したのだ。ＧＣのセキュリティは厳重だが魔術に対抗するものは何一つない。ＳｕｐｅｒＮｏｖａだって魔術を使われたらさすがに歯がたたないだろう…。
幾らなんでも早すぎる…。魔術を甘く見すぎていたか…？
「どう…されますか？」
やはり私がやらなくては。これ以上隊員を不安にさせてはいけない。
「私が動く…。各部隊長に緊急通信を開け。」
「はっ！」
各部隊長を部屋に呼んでにＧＣ厳重警戒命令を出した。暗殺部隊が拘束された事は伝えなかった。部隊長が４人もいないとなると防衛ラインに致命的な混乱を引き起こすことになる。特に軌跡が居ないと明日のゼアール強襲作戦を実行することが極めて厳しくなってしまうのだ。７番隊副隊長に隊長の荷は重すぎる…。
とにかく急がなくてはならない。ゴードンは殺るときは殺る男だ。何としてもあいつらの命だけでも守らなくては…。今の私にゴードンを倒す術はない。こうなれば…最終手段に手を出すしかない…か。

男は大きな身体を椅子から持ち上げ横に有る本棚に並んでいる本を一冊奥へと押した。すると天井から音をたてて酷くくすんだ大剣が降りてきた。邪剣『刹那』…伝説となった大剣である。真の使用者の前にしか姿を現さない幻の剣。終末を呼ぶ獣が封印されていると言われている。男が邪剣を握るとドス黒いオーラが刃から出てきた。刃が血の赤に染まっていく…。男は吐血した…口から血が垂れていく。

「光の戦士がどうした？弱っているぞ…ククッ」

刹那は男に語りかけた。刃には身体が真っ赤な自分が映る。

「久しぶりだな見ないうちに老けたか？」

男はふっと笑って見せた。

「まだまだ現役だ。でないと困る…。」

剣を背中の鞘にしまうとため息をついた。一瞬でも隙を見せればこの剣に喰われてしまう。さて一刻も早くゼアールへ向かわなくてはならない…。男はセンターへ向かった―。

第十八翼　暗黒の翼

不思議と身体に痛みはない―。俺は…死んだのか？佑助が瞳を開くと目の前には血まみれの軌跡の姿があった。まだ手首に巨大な釘が刺さったままだ。出血が止まらない…。
グローもまた大量の出血をしている。肩の辺りから腹部に渡り切り傷ができていた。肩が震えグローの眼開いてが憤怒の色に染まっていく。
「何をする！！邪魔だぁぁあ！！！！！お前からコロス！！」
暗黒の瞳をギラリと光らせいままで佑助に向かっていた血に染まった大斧を軌跡へと振りかぶった。軌跡にはもう避ける力も残っていないようで瞳を閉じていた。軌跡が血だまりの中で膝をついて剣が掌から離れたとき二度目の血が流れた。
同時に高い悲鳴と倒れる音…それは軌跡の声ではなく、グローの悲鳴だった。グローの心臓の辺りに刀身が赤い大剣が刺さっている。グローは口から大量の血を吐いて目を見開いて息絶えてしまった。剣が引き抜かれるとグローの死体は血だまりの中に倒れて冷たく動かなくなった。殺人鬼の最期にしちゃあ上出来だろう。倒れた軌跡を持ち上げたのは他でもない総隊長だった。
「待たせたな。」
いつの間にか身体を固定していた釘が外れて動けるようになっていた。意識のない守と大和も十字架から外され、総隊長に保護された。
「よい。全員無事だな。良かった…。」
総隊長は安堵の溜め息をついた。よく見ると首筋に汗が流れているのが分かる。余程焦ってきたのだろう。
「いやぁ…さすがだねぇ。ＥＡＲＴＨ最高指令長さん？」
いつの間にかゴードン、奥の機械兵達が武器を構えていた。この数の勢力…差は圧倒的だった。すると総隊長は佑助達に背を向けて小さく呟いた。

「ここは任せろ…この先に行くと俺が乗ってきた船がある…。それに乗ってGCに帰還してくれ。…中に緊急治療セットも積んである…。」
軌跡は腕の傷を押さえながら声帯を潰されたのか掠れた声で言った。
「しっしかし…この手勢では、父上も…」
総隊長からは今まで感じたことの無い程の殺気が感じられた。殺気だけで人を殺してしまいそうだ。
「だからってお前が戦うのか？足手まといになるだけだ！さぁ行け！！」
佑助はぐったりとした大和を担いでから軌跡の肩を叩いて、頭(かぶり)を横にふった。
軌跡は一瞬躊躇ったがすぐに頷くと守を担ぎ上げて歩き始めた。
「ふふっ…そうはいきませんよ？」
ゴードンがそう言うのが早いか機械兵達が魔術を発動させ、背を向ける佑助達目掛けて猛攻撃を開始した。魔術攻撃は目に見えないため回避が出来ない。しかしその魔術攻撃を総隊長は全て一本の大剣で受け止めてしまった。まるで全ての攻撃が剣に吸い込まれていくようだ。佑助達はゆっくりだが確実にゴードンから距離を離していた。
「ちっ…流石に刹那では…」
ゴードンが言うと総隊長はニヤリと笑って大剣を天に向けて突き出した。すると頭上から黒い雷が落ちだした。雷は機械兵の軍勢の上で集まって巨大な稲妻を落とした。次の瞬間には全ての機械兵が焼き焦げていた。機械兵は一体として動いている個体が無く、ゴードンのみがその攻撃を回避していた。手には剣が握られている。いやに刀身が白い…その白さは白を越えてまるで光そのものだった。
「聖剣…やはり貴様が…。」
総隊長は息を飲んだ。急に人工呼吸器が苦しくなってきた…。
「くくっ…闇は貴方に味方してくれますかねぇ？」
「ふっ…それはお前も同じことさ…。」

ゴードンは不敵な笑みをこぼした。剣を握る拳に力が入る。
「さぁ…ショータイムの始まりだ！！」

佑助と軌跡はそれぞれ大和、守を担いで宇宙船を探していた。応急措置として止血はしたがあんなに出血してしまったので意識ははっきりしない。まだ足元は覚束無いが一秒でも早く輸血しなければ共倒れだ。手首の痛みも佑助の動きを鈍くした。そんな激痛に耐えながら必死で歩いた。大和の呼吸数が徐々に減っている…このままではまずい…。軌跡も大分参っているようで顔色がすこぶる悪い。もう自分達が生きているのかすら曖昧になってきた。
なぜか途中に倒れていた機械兵はみんな丸焦げになっていた。そのお陰で戦闘を回避する事が出来たが、思うように身体が動かないため船を見つけるのに大分苦戦を強いられている。早く…船は…どこだ…？
暫く歩いていると軌跡が船を見つけた。中には人数分の医療セットが積まれていて佑助と軌跡は意識のないメンバーを治療カプセルに入れた。治療カプセルは中にいる生体の治癒スピードを飛躍的にあげる装置である。あまり意識のない者には向かないのだがこの際そんな事も言ってられない。
佑助達は自分の怪我の治癒を行った。手首、足首にあんな巨大な釘が刺さっていた割にはあまり傷が深くなかった。しかしなぜか痛みは止まらない。佑助は右半分が機械だから軌跡達の半分の痛みしか感じないはずなのだが…。
ここで待つのは些か危険な気もするがこの痛みでは運転など出来ないのだ。軌跡もしかり…佑助達は総隊長も待つことにした…。

二人の戦士は既にボロボロだった。身体中には傷だらけで血も止まらない。息も大分上がっている。もう動けるような体力は残っていない…。互いに相手の出方をうかがった。静寂の中意識だけが朦朧としてきた。身体中が痛む…今にでも気を失ってしまいそうだ。早

く決着を着けなければ。
一瞬気を緩めたその時だった。身体中から激痛が走った。今まで感じたことの無い…真の痛みだった。総隊長は気を失ってしまった。やがて剣の刀身から黒いオーラが湧いてきたと思うと中から身体の黒い巨大な龍が出てきたのだ。総隊長の口から黒い血が垂れ…龍の身体が完全に剣から出てきた。
龍の体長は１０ｍ程で翼で飛んでいた…目は紅に染まり合わせただけで命を奪われそうだ。ゴードンは目を見開いて笑っていた。
「これだぁ！！これが終末の獣ぉ！！これで俺も神と…！？」
突然ゴードンの身体中から黒い血が吹き出した。
「ぐぁぁぁぁぁ！！なぜだぁぁぁ！！」
叫びと共にゴードンは一瞬にして命を落とした。

佑助は怯えていた…。とこからか男の叫び声が聴こえたかと思うと軌跡が突然甲高い悲鳴をあげて気を失ったのだ。とたんに黒い血を吐血し、黒い血は軌跡の口から止めどなく出てきた。佑助は慌てて治療カプセルに軌跡を入れスイッチをいれた。中で軌跡の吐血は止まった。安堵の溜め息が漏れる。
軌跡はあんな事が起こったのに佑助には何も起こらなかった。むしろさっきまでの謎の痛みが消えたくらいだった…あれから何か胸騒ぎがする…ボスに何かあったのか？…。
佑助はそっと置いてあった軌跡の長剣を懐にしまい来た道を戻っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8973z/

銀色の翼

2012年1月4日01時45分発行